

ちょっと前に母方のばあちゃんが死んだときのこと、まあ大した話じゃないんだけども。

僕がばあちゃんっ子になるぐらい、基本的には優しい御仁だったのだが、マナーの点ではちよいちよい厳しい側面があったように思う。

もう三十年近く前、僕が小学校に入りたての頃。当時両親と三人で住んでいたマンションと母方の実家が徒歩五分の距離だったんで、時たま父親が在宅している週末は、じいちゃんばあちゃんを含めた五人で食卓を囲んだものだった。

そういう場で孫が一度「美味え」と言ったメニューを連発するのは祖父母のあるあるだろう。うちもそうだった。とは言え僕は、その時点でベロが人並み外れたバカだったもんだから出された食い物はだいたい、美味え美味えと食っていた。食えなかったのはおせちの重箱に入っているクワイぐらいだった。

ばあちゃんがよく作ってくれたのはカレーと肉じゃがと豆腐のステーキだった。どれも好みだったがカレーと肉じゃがに入っているじゃがいもが、ガキの僕の口にはちよつとデカすぎた。デカいの自体が問題なんじゃなく、勢いよくバクバク食えないのが面倒だったのだ。その点、「豆腐のステーキの食いやすさつたらない。だから美味い不味いではなく、好き嫌いで言えば間違いなく一番好きだった。ずいぶん生き急いだ考え方だと思うが、あの頃生き急いでいたのは、そうしなきゃ周りに置いていかれるからじゃなく、そうするのが楽しいからだった。

その日の食卓には豆腐のステーキが上がることになっていた。年がら年中敷かかれているホットカーペットで尻が温かったから冬だったはずだ。ばあちゃんが台所で支度をしていて、他の四人が和室の、いつもの位置に座っていた。右隣では父親がマイセンを止め処なく吸い、左隣では家族で唯一酒を飲むじいちゃんが、徳利で熱燗を飲(★や)りだしていた。最奥の母親はテレビを観ていた。ブラウン管が何を映していたかまでは、さすがに憶えていない。

ばあちゃんが、焦げた醤油の匂いを伴って豆腐のステーキを持ってくる。母親と僕が立ち上がって飯やら味噌汁やらを運ぶ。箸を掴む前に手を合わせ、「いただきます」と言うぐらいの礼節は持ち合わせていたが、当時の僕にとってそれは礼節でなく単なるルールだ

った。

食い始める。僕も盛んに箸を動かすが、何倍も体重差がある父親の吸引具合には敵わない。あらかじめ目の前にあった取り分を早々に平らげて大皿に狙いを定める。「おい」と僕に言いながら右手を伸ばし、対角線上に置かれている豆腐を箸で差す。「あれ、ちよいと取れ」。言われたとおりに僕は豆腐を摘まみ上げ、そのまま父親の箸に、直接渡そうとした。それで父親が器用に掴んだ瞬間、ばあちゃんがケンとした声で「渡し箸したらあかん」と言い放った。確かに「渡し箸」と言ったのだ。

ワタシバシってなんだ、と戸惑っている僕を、父親が肘でちよいちよいつついた。見ると苦笑が浮かんでいる。「怒られてるぞ」と言いたげである。「自分は関係ないけどな」というツラである。

この父親という奴がもう、プライドを煮しめて腐らせたような男で、人に頭を下げたり「ごめんなさい」と言ったりしているところを見たことがない。仕事場でどうだったかは知らんが少なくとも家ではそうだった。義両親にすらその態度だったんだから、腐っているどころか懲びていたに違いない。昔風に言えば頑固親父、現代風に言やあ無礼なコミュニケーション、ということになる。そのせいで、本来なら親子揃って、もしくは父親単体で謝るべきところを僕に押し付けてやりすぎず、という場面がたびたびあった。歩き煙草をしているのを通行人に咎められたときですら僕を盾にしようとしたぐらいだったから、相当野暮な人間だった。まあ父親にしてみれば、ガキに頭を下げさせておきやあ万事上手いく、という腹づもりだったのだろう。

その晩もそうだった。気付かれないよう肘で指示して、僕に謝らせようって魂胆だった。まだ幼い僕としては実際に自分が悪いことをしたかどうかはどうでもよくて、とにかく怒られたくないって気持ちが一番先だったから、とりあえず「ごめんなさい」と言った。それで場は収まった。無論、孫の謝罪は余所のカギより効果がある。父親の思惑通りだった。今振り返ってみれば、父親に終ぞ反省の機会がなかったのが問題っちゃ問題だったのだが、僕は僕の父親しか知らなかったから、父親なんて存在は古今東西そういうもんなんだと思っていた。現実にはそういうもんじゃなかったもので、父親は母親に愛想を尽かされて無事に熟年離婚と相成ったわけだが、それはもうだいたいふあとの話。

この出来事に於いて、僕と父親だけじゃなくばあちゃんも間違ってたと気付いたのは数年後、中学生になってからだった。最低限のテーブルマナーは給食やら何やら（それこそ家庭での教育も含めて）で身につけられるから、正確にはマナーと記憶が中学時代になっ

てようやく結びついた、と言うべきかもしれない。昼休みに図書室で小説を読んでいる最中に、別に食事の場面を読んでいくわけでもなかったのに、唐突に閃いたのだった。ばあちゃん、もしかしてあのとき、「箸渡し」って言いたかったんじゃないのか？

渡し箸とは食器に橋を架けるようにして箸を置くことをいう。老若男女問わず色んな人間がやっているのを見かけるし、僕も未だによくやらかすのだが、そもそも箸置きがないような場では許されるものであるらしい。箸袋を折り畳んで即席箸置きを作らんでもいいそうさ。そもそもが由来のはっきりしない、似非マナーの類いだという説もある。いずれにせよ無駄に気にしなくてよろしい、というわけだ。

一方、箸と箸で直接食い物を受け渡しするのは箸渡しといって、こっちは割と由緒正しいマナー違反である。葬儀の際、火葬場で茶毘に付された故人の遺骨を、親族が箸を使い、二人がかりで拾い上げて骨壺に収めるくだりがある。骨上げである。箸渡しは骨上げを連想させるからマナー違反なのだ。

ばあちゃん、やっぱあれ、「渡し箸」じゃなくて「箸渡し」だわ。

とは言え勘違いしてしまう気持ちもよくわかる。「橋渡し」という同音異義語もあるぐらいだし、どっちかと言えば「渡し箸」の方が「箸渡し」っぽい。それに箸に関するタブーといえば仏箸、迷い箸、寄せ箸、逆さ箸等々、「○○箸」と称されるものばかりで「箸○○」とは呼ばないから、混同するのもやむないだろう。僕だって今なお「辞」という字の「舌」と「辛」の左右の位置をいちいち迷うし、「煮詰まる」やら「潮時」やらの正用と誤用が、どっちがどっちかわからなくなる。

ともかく、中学生の僕は数年越しに理解でき、納得できたのだった。しかし目の前にはあちゃんがいるわけではないからその場でツツコミをいれるわけにはいかなかったし、何より僕は小説を読んでいる真っ只中。幸か不幸かそれが大層面白かったものだから、僕は一瞬で「箸渡し」も納得感も忘れてしまったのだった。

恐るべきことに、それはもう二十年も昔の話だ。時間が進んでいくあいだにじいちゃんが腎臓がんで死に、両親は熟年離婚して、そして僕は鬱病に罹っていた。

気分が落ち込むだとかやる気が起きないだとか、そういう鬱病の代表的な症状とされるものについては、思春期あたりからずっとそうだったもんだから自覚しづらかったのだが、ある時期から不眠が表れて、それが実には難儀であった。寝る子は育つ、を地で行く形で二十代半ばまで過ごしてきた僕からしてみりゃ日に二時間しか眠れないというのは致命傷であり、情緒のエラーが一晩で修復できなくなる。当然仕事は仕事にならず崩壊、暇ができ

るたびに、自殺したろうかって心境に陥るようになったので観念して心療内科の門を叩いたところ、長ったらしいペーパーテストを経て無事鬱病と診断され、眠剤その他の薬を処方された次第。

僕の場合、眠剤の効果は観面だった。用法を守ったら常に睡魔に跪くほどだったので自主的に減薬せねばならないほどだった。問題は起きているあいだの情緒を保つための抗鬱剤である。一口に抗鬱剤と言っても様々あり、ジェネリックかどうかでも効き方が違う：：のような気がする。鬱病なんてのは「気がする」の盛り合わせなので無視するわけにもいかない。なのでまずはどのタイプの薬剤を服用し続けるかを決めるお試し期間があるのだが、こんなもんは漫画の試し読みと同じで、一発目に自分に合う薬を引き当てられることなど減多にない。大抵は合わない薬を飲んで副作用ばかりが続々到来して、作用が一向に訪れてくれない日々を過ごす羽目になる。そのあいだは太ったり痩せたり吐いたりキレたり泣いたり大変に忙しいのだが、とりわけ厄介なのが腕の震えだった。鬱病の症状に副作用が掛け合わされると、ピークするときにはもう、冗談抜きにカクテルを作るバーテンぐらい震える。しかも日がな一日震えているというよりは手先に集中したときにだけ出てくるから、制御しようがない。こうなると文字が書けない、キーボードが打てない、車の運転にも支障が出る、というわけですまず一般社会のお荷物となる。

五年ほど交際を続けていた恋人と飯を食いに行つた際にはクレカのサインすらままならなかった。渡されたペンを虚ろなカクテルシェイカーに見立て、腕を振り乱す僕を、彼女は思い詰めた視線で眺めていた。その視線には憶えがあつた。それはかつて僕が母親に向けていた視線だった。

幼少期は普通に生きていたようだった母親は、僕が中学へ上がる直前に突然バグりだし、マンションから飛び降りようとしてたり車道の真ん中に寝転がって轢き殺してくれる自動車を待ち受けたりドアノブにタオルを引っかけて首を吊ろうとしたりし始めたのだが、よくよく聞いてみたところ、最初に精神病と診断されたのは彼女が大学生のときであつたらしい。それから十五年ほど薬の世話になつていたが、父親と見合い結婚して僕を孕んだ際に許可なく断薬したのだという。そのツケが祟つたのか、母親の病状は措置入院の話が持ち出されるぐらいには深刻だった。本人は断固として拒絶したし、父親は単身赴任で家を空けていたからまともに向き合わずに済んだし、ということと結局病院送りにはならず彼女の世話、もとい監視はもっぱら僕とばあちゃんの役目となつた。

自殺企図やら興奮やらが烈しく表出する母親に処方された薬の量は膨大だった。僕自身

が薬を服用するようになった今でもそう言える。そのため副作用らしき異常行動も多く見られた。一番顕著だったのは夢遊病だ。寝惚<sup>ねぼ</sup>けた母親はそこかしこで小便をした。台所、洗面所、玄関、ところ構わず排尿する。そして出し切った頃には我に返っているらしく、絞った雑巾を持ってきてのそのそと拭き始める。たぶん見つかっていないと信じていたんだろうが、僕は何度か目撃してしまっていた。我が親の、惚けるにはまだ早い我が親のそういう側面は、ある意味で自殺未遂より堪えるものだった。だから僕は、のちに恋人から受けるのと同じ視線を彼女に送ったのだった。

母親が落ち着いたのは僕が二十歳かそこいらのときだった。そのあいだにじいちゃん<sup>じいちゃん</sup>は死んでいた。落ち着いたといっても決して完治したわけではない。処方される薬の量も相変わらずだったが、少なくとも始終目を離せないというような状態からは脱していた。それで多少安堵し、就職すると同時に家を出て、そろそろ恋人との同棲が話題に挙がるようになったあたりで今度は僕自身が鬱病に罹り全てご破算。正社員の資格と定期収入を失ったカスに価値はなく、一人勝手にふさぎ込むだけならまだしも、鬱病は普通に周り、特に近い人に迷惑をかけ散らかすと自覚したゆえに恋人とは熟議の末お別れ。さようなららしい人生。こんにちは一人きりの日陰。

諸々の塵芥のごときエピソードがやむを得ず堆積したこともあって、僕は人と比べて親を尊敬していない。別に恨んでるわけじゃない。親なんてそういうもんだと踏ん切りはついているし、この歳になってなお自分の人生の責任を親に押し付けるような気概は一つも湧いてこないが、何と言えがいいか、親に親ヅラされると腑に落ちない感じはする。二人とは適切な距離感の他人として接するのが丁度よく、血縁みたいな概念はちよつと荷が重すぎるのだが、これも一種の甘えなんだろう。

母親の監視が終わったあとは自身の病痾も相まって、今後ともお互いにとってより良い関係でどうぞよろしくって気分だったのだが、程なくしてそうも言ってもらえない事情が転がり込んできた。両親の離婚である。僕が物心ついたときにはもう父親はほとんど家にいなかった。彼らの、愛を交えた夫婦生活みたいなものは知る由もなかったのだが、母親が言うには定年退職で二人揃って家に居る時間が増え、父親があれこれと昭和気質を發揮した結果、いよいよ堪忍袋の緒が切れたらしかった。

ガキの時分なら動揺して泣き喚きもしただろう。しかしこっちは最早、自分事で手一杯である。なので勝手にしてくれりゃあ結構、と最初は静観していたのだが、母親からは離婚の事務的な手続きを、父親からは仲裁を求められたので必然、あいだに立つ羽目に

なった。もう独り立ちした息子に寄りかかるなどでも言ってお放ってやれりゃ良かったのかもしれない。しかし僕は独り立ちしておらず、はっきり拒否する理由なんて少しも持っていないかったのだ。

いくら歳を取ろうが離婚の原因なんか若者の痴話喧嘩と大差ないらしい。「あの日無断で尻を撫でられた」云々と、親からだけはマジで聞きたくないタイプの愚痴が滔々と語られ、僕の中に新たな地層として鬱積した。母親の決意は固かったが、父親も父親でちっとも納得しない。煮しめて腐ったプライドは最早化石みたいに凝固していたもんだから、返ってくるのは反論というよりも癩癩だった。遂には僕の鬱病を当て擦り気味に責め始めたもんだから、これはもう取り持つ意味がない、ということでは僕は離婚側、すなわち母親側についた。

それから相当の紆余曲折があったが二年経ってようやく決着。マンションは父親の持ち分となり、母親は実家、ばあちゃんの住む家に身を寄せることになった。今父親がどうしているか知る由もない。明白に母親の味方になったあたり、つまり離婚が成立するより前に個人的に縁を切られたからだ。まあ、これがお互いのためだったと思う。

騒動が収拾してすぐ、次の問題が訪れた。まさに人生という感じだ。

母親から「おかあちゃんが倒れた」と連絡が来たのは数年前、平成の最終盤らへんだった。起き抜けに不調を覚えたばあちゃんは自ら救急車を呼んで病院に運ばれ、そのまま入院に至ったという。取るものもとりにあえず教えられた総合病院へ駆けつけた。脳梗塞だった。MRIの画像をディスプレイで見せられながら主治医に告げられる。「右半身が十割、だとすれば左半身が八割ですね」。僕は以下のように考えた。十点中八点、つまり八割、高校受験でも大学受験でも余裕で合格できるわけか。

医師の説明は合理的だったのだと思う。僕が勝手に、要らん希望を見出したのだ。希望ほど簡単に警戒心を剥がすものはない。僕は遠からず、ばあちゃんが万端に復活するであろうと思いついていた。それまでの、人の手を借りずに過ごしていたばあちゃんが戻ってくるだろうと。年齢すらも考慮せず無邪気に、幼気(★いたいいけ)に、バカみたいに。

青写真はすぐに破れた。リハビリ病棟での、半年間の奮闘を経てもばあちゃんは、自力での歩行すらままならず、むしろ動きは悪化の一途を辿った。いつまでも入院させてはもらえないから、自宅へ戻ることになる。ここからが艱難だった。電動ベッドやら歩行器やらを揃え、準備を整えたはいいものの、肝心の介護の担い手が足りていない。鬱病の四十年選手である母親は自らの生活すら疎かにするのに半身不随のばあちゃんの世話など務ま

るはずもない。宿命的に僕に鉢が回ってくる。所詮は不自由に自由を謳歌する非正規雇用。責任なく困窮する貧乏人。この際だからと、それまで意固地に住んでいたアパートを引き払ってばあちゃんの実家に入る。僕も鬱病の、十年選手になろうとしていた。

三者の日々は不足を補い合えない日々だった。ばあちゃんについてはやむなくケアマネージャーに頼る。デイサービスに頼る。福祉という福祉に頼る。僕や母親も医者に頼る、薬に頼る。頼る。頼る。日常生活の述語のほとんどが「頼る」。一人ぐらしもやめて実家に戻ると、余計に頼る生活が色濃くなる。自活を奪い返そうとする矜持はない。開き直る胆力もない。果たせない希死念慮ばかりが膨らむ。日々を虚ろに、介護に費やす。服を着せる。身体を拭く。薬を飲ませる。便を処理する。僕がそうしているあいだ、ばあちゃんは悔しそうに目を強く瞑って耐えている。かつて食卓を囲んだ和室から、矜持の一切合切がこそぎとられていく。情緒は常に、三途の川の岸边にある。しかし渡し舟が見当たらない。向こうへ架かる橋も見当たらない。

「頼る」以外にもう一つ、扱いやすい述語がある。「逃げる」である。一人暮らしから逃げる。社会から逃げる。今後の展望から逃げる。介護から逃げる。老いさらばえるばあちゃんの実像から逃げる。

僕たちはすぐに音を上げ、ばあちゃんには老健施設に入っていたただく運びとなった。ばあちゃんにとってもその方が便利だったと言えるだろう。なんとでも、いくらでも善様(★よさま)に表現できるだろう。しかし僕は明白に「逃げた」のだ。

ばあちゃんはそのまま、認知だけでなく視覚や聴覚をも急速に手放していった。見舞いに行くと「テレビの音が聞こえん」と言う。僕はばあちゃんのベッドに転がっているイヤホンを見遣る。怒鳴っているような音漏れがこっちまではっきり聞こえる。「聞こえん」とばあちゃんは言う。

間もなくコロナ禍が始まった。面会謝絶。現代技術を駆使してビデオ通話を試みるも、見えん聞こえんですぐさま頓挫。とうとう車椅子すら自力で使えなくなったと介護士から伝え聞く。コロナ禍は続く。ばあちゃんの症状も進む。面会が叶わないあいだに住居が老健から特養に変わった。依然コロナ禍は続き続ける。施設の対応が一旦緩和されて、家族に限って十五分前後の面会が許されるようになった。久々に直で会ったばあちゃんは僕を見て、悚然とした風に「よろしくお願ひします」と言った。衝撃はなかった。厚顔無恥な希望はもうとつくに、現実在即した諦観に塗り潰されている。そりゃあ、惚けるだろう。惚けるしかなからう。惚けずには生きられんだろう。惚けてまでして生きなきゃならん

だから、惚けてまでして生きるだろう。

再びの面会謝絶。そのうち特養にもウイルスが広がって、ばあちゃんも感染した。それ自体はなんとか治癒したものの後遺症が長引き、遂に昏睡した。八十九歳。手の施しようは、あるにはあるらしいが、過剰な延命措置は過去の本人も望んでいなかった。そのときのばあちゃんは生きたかったのかもしれない。思う存分に寝こけていたかったかもしれない。だがどうしようもない。病棟に移され最低限の栄養剤の管一本を繋がれて、床ずれが起きぬよう寝返りを打たせてもらう日々。

こうなると幕引きについて考えねばならない。葬儀である。母親は「直葬にする」と言う。「誰か呼ぶか」と訊くと「誰も呼ばん」と返ってくる。実際問題、僕はばあちゃんの親族の顔を見た憶えがない。末子であり、全部で三人いた兄弟がみんな先に逝っているのは、情報としてだけ知っていた。そうなると呼ぶ候補は甥や姪、あとは十五年前に死んだじいちゃんの親族ということになるだろう。そういった家系図の面々と、僕は一人として会ったことがない。事情があったのかもしれないし、なかったのかもしれない。「ええねん、あんなん誰も、見舞いにも来んかったんやから」と母親は吐き捨てた。確かにそれはそうだ。そうだが、だとすれば僕たちはまるで孤独な家族ではないか。矛盾した言い回しかもしれない。しかしかつてばあちゃんが当たり前に居た実家の空白は、僕たち親子の居住だけでは埋められていない。家全体を包む冷えた空気から嗅ぎとれる匂いは、孤独な家族としか喻えられない。

結局二人だけで見送ることに決める。時節柄も時節柄だ、としておけば態の良い言い訳にもなる。他方、大規模な葬儀を取り仕切る気力など互いにないので、ほっとした、と言わなければ嘘になる。しようもない子孫。

ばあちゃんは眠ったまま二ヶ月生きた。よう生きた。それで午後十時四十八分に、息も乱さずに死んだ。医師の死亡宣告を電話越しに聞いてすぐ病院に向かったが、そこに仰臥しているばあちゃんは表情を緩ませており、家で介護されているときよりはまだ、幸せそうだった。

そこから急に慌ただしくなった。事前に知らされていたとおりではあったのだが、直葬というものは実に呆気ない。遺体は病院から葬儀社の安置室に運び込まれ、火葬場の予約をし、待っているあいだに手向けの品などの細かい部分を詰める、という段取りだ。

僕の方は何も望まなかったが、母親は入れ歯を入れてやりたい、と言った。あの世でしっかりと食い物が噛めるように、と。事前に得たネットの情報では、入れ歯は拒否されるは

ずだったのだが、快諾された。地域によっては許されるらしい。下手に口を出して、余計な恥をかかずに済んだ。

二晩明けて、朝一番の火葬が決まる。運び出される直前、涼しい安置室の棺に横たわるばあちゃんに触れてみると、湿気ってはいないもののゴムのような弾力があった。ばあちゃんは生きてるように礼儀正しく、死を死んでいた。棺が閉じられると、自分の呼吸が深くなっているに気付いた。

別々の車で火葬場へ向かう。タクシーの中で僕と母親は沈黙を貫いた。互いに言葉を探そうともせずシートに凭れていた。雑談の類いが思い浮かばなかったのだが、それは悲しみに由来するものではない。これまでの日々由来するものだ。

到着してすぐ、炉の前で僕と母親、それに若い職員の三人だけが集まる。彼が段取りを説明するあいだ、母親はずっと鼻をすすっていた。そう言えば病院で死に顔に直面したときも、安置室で白装束を目にしたときも泣き通しだった。今更何を泣くことがあるのか。僕にしてみれば惚けが進んで蒙昧になったあたりではあちゃんは死んでいた。そうじゃなきゃ、そうだったことにしなけりゃ、ばあちゃんの生涯に失礼だろう。現時点の、どうやら一生治らんらしい精神の病を抱えながらもなんとか明晰である僕の頭はそう考える。僕は自身、惚けちまった僕のガワと同一人物として扱われた日には、たぶん怒る。こう思うのは父親譲りの腐ったプライドゆえなのだろうか。ともかく、だから僕は相前に涙を済ませていた。独りで酒を飲んで涙して、それを何日往復したかわからんが、誰にも気付かれなかったはずだ。そのおかげで、真正銘の最期に立ち会っても泣く気にはならなかった。別に何度泣いたって構わないんだろう。同じギャグを繰り返して笑わせるのを天井というが、泣きの天井というのも存在するのかもしれない。そもそも僕は孫であり、母親は娘である。思い入れも深いだろう。僕も母親が死んで燃やされる段になったら、涙の一滴でも零そうかって気分になるのだろうか。

ごめんなあ、ばあちゃん、不謹慎な妄想かもなあ、あんなに美味えもんばっか食わしてもらってすくすく育った結果がこの思考回路のザマでなあ、ごめんなあ、などと自己愛に充ち満ちた詫び言を、無然としたツラで積み上げているうちに職員が台車を押し始め、ばあちゃんは炉の中に消えた。

火葬には一時間半ほどかかるという。母親はロビーで待ち、僕は外をふらつくことにした。火葬場の周辺には墓石が立ち並び、その向こう側に大きな湖があった。ぐるりと一回りすれば程良く時間を潰せそうだった。平日の午前中、まだ柔い日光は湖面に反射した途

端牙を剥いて視界を襲う。なるべく目を背けながらぼんやり歩く。次の瞬間には忘れてしまふような、ありふれた住宅街の景色が次々流れ込む。このあたりに来ることは滅多にないが、それでも昨日や去年と変わらない日常なのだと言信できる静けさ。生活と連続した空間で今、ばあちゃんが茶毘に付されている。毎日毎日、病院では人が死に、火葬場では遺体が燃やされ、生きる人は生きている。頼って逃げてばかりの人が多くいて、自立している人もより多くいて、そして身近な死に遭った人は僕と同じように自失して、全てはごく普通の日々である。知らない街を歩いていると、そういう感情が自然と宿る。錯覚かもしれないし、実のところ現状は何も変わっていないのだが、凝着した想いが少し散らばってくれたようだった。

余白まみれの頭になって湖を一周し、火葬場に戻ってくる。タクシーが引切りなしに出入りしていて、僕とは関係のない喪服の人々がそこかしこに立っている。蝶ネクタイを着けた子どもにだけ活気があった。ロビーに向かうと母親は丸椅子に姿勢を正して座り、じいっと壁を見つめていた。その傍らに手持ち無沙汰で立ち竦んでいると、やがてばあちゃんの苗字が呼ばれた。

さつきと同じ職員が台車の取っ手を握って炉から引き出す。台車の上は呆気にとられるほど寂然としていた。棺は灰になり、入れ歯は跡形もなく、ただ骨の欠片だけが、頭から爪先まで順繰りだと辛うじてわかるように並んでいた。

母親が遅しい大腿骨を指差して、「ここはどうして緑なんですか」と訊く。確かに着色料で染めたみたいなの、人工的な緑色をしている。職員が「別れ花の葉や茎の色がうつったのです」と厳かに言うもんだから、はあそれはそれはと頷いてみせたのだが、よくよく考えると植物より先に肉が燃え尽きるなんてのはおかしな話だ。あとから調べてみると、生前から出てきた骨は緑だけでなく黒や紫に染まっていることも珍しくないようで、生前に患っていた病や投与されていた薬剤の影響など、諸説あるそうだが、本当のところはよくわかっていないらしい。別れ花に染まったというのももちろん迷信の類いで、ずいぶんメルヘンな迷信もあったもんだと思う。しかし冠婚葬祭なんて、言ってしまうえば最初から最後までメルヘンなんだから、冷笑めいた疑問を持ったって詮方ない。

菜箸ぐらい長い金属の箸を手渡された。骨上げの時間だ。骨上げだってメルヘンである。骨壺に収まるだけの量を下半身から順に収めていくのだが、あの世でミニばあちゃんに転生するわけじゃあるまいし、詰めるだけならどんな手順だって構わんだろうとついつい思ってしまう。思ってしまうが、思うに留まって口に出さずに済んでいるあたり社会性の片

端に、未練がましく指一本で引つかかっているのかもしれない。

別に遺骨に相對して皮肉ばかり思い浮かべていたわけではない。そのとき僕は昔日のことを思い出していた。「渡し箸」だ。行動が記憶の根元に絡んで強かに掘り起こす。ケンとした一喝が蘇り、健勝だった祖母が蘇り、ついでに父親の苦笑も蘇り、久々に頭ん中が記憶まみれで忙しいっただけじゃなかった。ああ、これが渡し箸か。違う。箸渡しか。どっちだ。帰ったら調べよう。どっちにせよマナー違反だ。いや、今は正しい作法なのか。わからんな世の中の規律は。余計なことを考えてる場合じゃない。ただでさえ箸を使うのは緊張するんだから。

最初は上手くいっていた。人間の骨はだいたい棒状だから、それらを摘まむのはさほど手間じゃなかった。問題は最後の最後、頭蓋骨だ。当たり前だが丸みを帯びている。骨壺に入るサイズとなると、どうしても小さな、丸みのある骨片を選ばなきゃならない。豆粒を運ぶ、とまでは言わないが、長い箸で協力するのは普通の人でも苦労するだろう。あまつさえ僕たち鬱病親子。日頃から手先が震えている。集中すればするほど震えが顕著になる。

最初の挑戦では母親が箸を滑らせた。次は僕がミスる。三度目の正直、とばかりに気合を入れると、今度は同時に頭蓋骨を落とした。

遂に僕は吹き出した。いつの間にか母親も笑いだしていた。同じ日を思い出しているからか同じ失敗をやらかしたからか、はたまた単純に気まづかったからか、とにかく二人して似た笑いを笑い続けた。箸を握ってるから腹は抱えられないけれども、声が漏れ出るぐらいに笑っていて、そのせいで余計に箸先から頭蓋骨が滑り落ちる。それでまた笑う。拾う。滑る。笑う。天井だ。職員は一切表情を変えず、しかしだんだん不審げに僕たちを見つめ始める。

火葬場で何をやってんだ、これは明らかにマナー違反じゃねえかって想いもよぎるにはよぎったが、僕たちは気が済むまで笑い続けた。